
東方忘昧変

アストレアセカンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方忘味変

【Nコード】

N0856T

【作者名】

アストレアセカンド

【あらすじ】

永遠亭で雑事に勤しむ鈴仙は久しぶりに休暇を貰った。温泉に地底にと妖夢と藍とともに行くと、なぜかこいしに絡まれペットになれと言われる。断ったら断ったで思いもよらないことが。

ここはどこか懐かしい幻想郷。様々な種族が住み、暮らし、調和を保っている。

人が、天狗が、吸血鬼が、鬼が、妖怪や魔法使いだって暮らしている。

その中で鬱そうと茂る、りっぱな竹林が存在する。何千年という時を経験した大木というわけでもなく、生まれたての若木とも違う、永遠に同じ竹林の中。そこに、ある家が一軒だけある。

人はその屋敷を『永遠亭』と呼ぶ。

有名な医がいることが評判で、人里でも名医と評判高い。その医には一人、妖怪で玉兔という種族の弟子がいる。

これはそんな弟子の休日。普段は忙しい兔が見つけた休息のひと時。

気の置けない仲間と共に過ごすゆっくりとした時間を、こころ行くまで堪能する。

「はあ、休日ですか」

ある朝、師匠であり尊敬できる女性、八意永琳さまに呼ばれて部屋まで行くと、いきなり休日を言い渡されました。先日から、今日は新薬の実験をするから予定を空けておけと言われたのにこれだと拍子抜けですが、口には出せません。師匠なりに思うところがあるのでしよう。

師匠がこちらに向き、赤と青のツートンカラーが目立つナース服がちゃんと視えた。目尻が下がって困っているような、アメジストやエメラルドのように澄んだ瞳が私を覗く。

「そうよ。急でごめんなさいね。実験は明日にするから、今日は英気を養いなさい」

と、いわれても……。今日は特に何もすることがない。人里に行

つてもすることないし。私の眼が邪魔をするし。

「それじゃあラブを貸してくれませんか？ 私も作りたい薬があるんですけど」

「それは駄目よ、ウドンゲ。あなたにはまだ薬の開発は早すぎるわ。少し外でも見てきて、しっかり幻想郷を見るのもいいでしょう」

「ですが私は人里には行けませんし、あんまり外にも出ないですし、自慢できることではないが、私は友達が少ない。師匠に言われて常備薬の点検などで様々なところを回っているものの、外に出るのはそれだけだ。後は宴会か、何か緊急事態が起こったときだけとかあとは基本的に外には出ずに、永遠亭で薬の調合を行っている。

「ウドンゲ、あなたは学ぶことを拒んではいけないわよ？ 何事も経験。たまには仕事以外で幻想郷を見てみなさい。何か感じることもあるでしょう」

師匠の言いたいことも分かる。自分で薬の調合をするのにも薬学書だけでは限界がある。経験の薄い私は、それこそいろんな病気を持つ人と関わり合いになった方が経験になる。そのためには外に出て、いろんな人を見てきなさいということだ。

「ですけど、狂気の眼はどうしても防ぎようがないですし……」
私は無意識のうちに瞼の上から眼を触る。

人を狂わせる狂気の眼。一目見るだけで私の意思関係なく、人を狂わせ暴れさせてしまう。永遠亭には人間がいなかったため、それほど気を使わなくてもいいのだが……。人里などに行くときそれこそまずい。それだけで一つの『異変』を作り出してしまいそうだ。

「ああ、それなら、これをつければいいわ。私が用意したの」
師匠は何やら筒に入ったガラスを出してきた。

「これはね、メガネっていう外の視力補助用の道具らしいわ。香霖堂で見つけたの。それにちょっと細工させてもらったけどね」

「細工……ですか？」

メガネというものをかけてみる。別段視力が上がった訳でもなく、普段となんら変りない。

「人里だけなら有効でしょう。ウドンゲの狂気の眼を抑える効果があるわ。ただし、完璧とは言えないから気をつけてね。プレゼントするわ」

「えっと……いいんですか？ 高価そうですね、これ」

ガラスをとりつけただけに見えるが、外装の赤い洩も着色に手が込んでいる。ガラスをここまで精巧にはめ込むのも相当の技術があると思われる。

「高価そうじゃないわよ。破損状態が酷かったから河童に手を加えてもらったし、術式を仕込んでもらうために紅魔館の魔道図書館に魔法をかけてもらった。……手が込んでいるので壊さないようにね」

「師匠……ありがとうございます！」

ここまで気を遣っていただけなんてっ！ 感無量です、師匠！

「ま、そういうわけだから。安心して休日を過ごしてきなさい」

「はい！ 行ってきます！」

早速めがねをかけて、部屋まで必要なものを取ってくる。お財布に薬を少し持って永遠亭を出た。

そういえば、白玉楼に私と同じような苦労を経験している友人がいた。もし都合がつかなら誘ってみよう。最悪一人になるかもしれないけど……行き先はそうだな……博麗神社に面白いものがあつたはずだ。

「行ったようね。全く、手を焼かせるのも大概にしてほしいわ」

鈴仙が出ていったことを確認し、私は奥の障子をあける。彼女は鈴仙・優曇華院・イナバという。私は愛着込めてウドンゲと呼んでいるが、彼女がいなかったときは鈴仙と皆呼ぶので私も鈴仙にした。

「はあ、今日のはあの子に実験をしたかったのに。急患なんてついてない……」

しかも間が悪いことに人間だ。季節性の風邪らしく、朝から門を叩かれて仕方なく看病しているが熱がまったく引かない。そこに鈴仙がいると、途端にややこしくなる。人間は暴れだすだろうし、あの子もそのことを気にかけるだろう。

「体調管理なんて魔法使いの基本でしょう？ 霧雨魔理沙」

ベッドに横たわる白と黒が基調のエプロンドレスを着た魔法使いがいる。

ため息をつきながらカルテに名前を書き込む。名前を呼ばれた魔法使いは苦しそうにうめくだけで布団からは起き上がれないようだ。一応薬は飲ませたけれど、熱は一向に引かない。もしかしたら新種の病気かもしれないが、耐薬性の高い病気などいっぱいある。しかも薬の効果が高すぎて、余分な副作用もついてくるため、現状様子見しかない。

「……ついてないぜ、ごほっ……っ！」

「お互いさまよ。はあ、あなた達人間の看病をする日が鈴仙の休日なんて、いたたまれないわ」

「……そういう割に酷使してるじゃないか……、そう思うなら、定期的な休日でも作ってやればいいものを……うっ、喉がいがらっばいぜ……」

「それはそうんだけどね。それと、あんまり喋ると辛いわよ？ 水でも飲む？」

「……いただくぜ」

魔理沙を布団から起こしてコップに水を注いであげる。先ほどから発汗が凄い。病気の特徴としては40度近い高熱と、下痢、嘔吐。それが2日ほどになるらしい。一日目はアリス「マーガトロイド」に看病してもらったようだが、さすがに素人では限界だと思ったのだろう。今朝早く連れてきて、患者を押し付けられた。

「ふう……ごほっ！ ……何で風邪なんか引いたのかな……。今までは薬で何とかなっていたのに……困ったもんだぜ」

水を飲み終えた魔理沙が咳を繰り返す。

いくら薬でも常備薬程度だ。もしそれが風邪ではなかった場合、常備薬では話にならない。

「ま、十分休みなさいな。何かあったら呼びなさい。てめが待機してくれるらしいから」

鈴仙とはまた別の兎、因幡てめが私の声に反応して障子を開けた。私としては頼りになる者だと思っているが、魔理沙はてめの顔を見るなり顔をしかめた。可愛らしいピンクのワンピースに人参の首飾りを首から下げる妖怪兎だ。

「……おい、いたずらするんじゃないやねえぜ？」

趣味は怪我の一手手前まで陥りそうな罠をそこかしこに仕掛けること、らしい。実際、はまっているのが鈴仙だけなのでなんとも言えない。

「何言ってるのよ。病人にそんなこと、するわけないでしょ？」

「ニヤニヤ笑うな。たく、白々しい嘘つくんじゃないやねえぜ……逆に気分悪いぜ」

それなら別にいたずらを実行してもいいというわけかしら？

「本人の許可も下りたけど、あんまり身体を動かせるようないたずらするんじゃないわよ？ 一応病人なんだし、悪化されたらこっちが困るわ」

「おい！ 私は別にいたずらを了解したわけじゃ……てめ、やめろ

！ ねぎは食うもんだぜ！ おい……ちょ……あ——っ！！」

ねぎはお尻に入れると薬効効果によつて熱が下がるというものがあつたが、私は薬を断然推奨する。食べ物をもんな風に使いたくないし。……なにより屈辱的だ。

「さて……お粥でも作つてあげようかしら」

未だ寝ているであろう蓬萊山輝代と魔理沙の看病に当たっている因幡てめ。それと魔理沙にもご飯を作らなければいけない。

「いつもは鈴仙も手伝ってくれるけど……あの子も結構苦労症よね……」

何でもひきうけてくれるからついつい頼ってしまうけれど、あの

子はいつ休んでいるのか。

「……もつと休日あげたほうがいいかしら？」
台所に立ちながら、ふとそんなことを思った。

「はあ、温泉ですか……」

白玉楼。幸い白玉楼の暴食姫、西行寺幽々子がいないため、それほど気負うことなくこの庭師、魂魄妖夢に会えた。だってあの亡霊、絶対私を非常食か何かと勘違いしてたし。会いたくない。

箒をもって庭を掃いている途中でお邪魔したため、箒を持ちながら妖夢は話を聞いている。彼女の白銀にきらめくサラサラの髪に、ひそかに憧れを持っている。腰に差した二振りの名刀から分かるように妖夢は剣士だ。しかも二刀流だ。かっこいい。

「なぜか休暇をもらいまして。一緒についてきてくれる伴侶を求めて放浪中というわけです」

「ほう、それはいいことだ。八意永琳は部下のことを考えてくれるじゃないか」

妖夢と一緒に雑談していた八雲藍も話しに加わってくる。九本の尻尾に金髪の髪。短くそろえられた髪は帽子で隠れており、帽子に何枚もお札が張り付けてある。藍さんの尻尾でもふもふされたいというのが私の夢だ。藍さんの式の橙ちゃんがよくやってもらっているが、うらやましい限りだ。

藍さんがいることは予想外だったが、藍さんも誘ってみよう。

「それで妖夢を誘いに来たんですけど……よければ藍さんも一緒に行きませんか？ 一度は行ってみたかったです、温泉」

「わ、私もか？」

なぜか妖夢と一緒に顔を見合わせ、悩んでいる。何か都合でも合わないのかな？ 無理に誘うのも気が引けるし、無理なら無理であきらめるしかないんだけど……。

「少し待ってくれ。ついでに妖夢も訊いておこう——」

「お願いします。鈴仙、少しかかりますのでお茶でも用意します。くつろいで待っていて下さい」

藍さんはそのまま目を閉じて固まってしまいうし、妖夢はお茶を汲みに台所まで行ってしまった。……誰も説明してくれないんですか？ この状況。

お茶を持ってきてくれた妖夢とともに藍さんの硬直が解けるのを待つ。

「そういえば伴侶を探していると言っていました。他に誰を誘うつもりなのですか？」

「うーん、前に宴会で仲良くなった人を訪ねてまわろうかなって思っ。でも妖夢や藍さんが来てくれるならいいかな。少ない方が楽しめることもあるし」

「……そうですか。それにしても、鈴仙。不満というわけではないのですけれど、少し疑問を言ってもいいですか？」

「……？ 何、妖夢？」

「いや、前まで『さん』づけだったのに、なぜ呼び捨てなのかと……い、いや、気に入らないとかそんな訳ではありませんけど、気になったというか、何というか……」

「だって、妖夢は妖夢でしょ？」

いつまでも他人行儀なのも悪いし、妖夢ならなんかこう、『戦士の友情』的な部分を重視すると思う。外観的に。だからいつまでも妖夢さんなのは本人としても嫌なんじゃないかな。

……あれ、なんか妖夢が固まっちゃった。心なしか顔も赤いし、大丈夫かな？

「いえ、そういうわけではなく……。確かに藍さんより前に私はあなたと仲が良かったといえそうですが……、前まで『妖夢さん』と呼ばれていたのが案外しっくりきていたからまた呼んで欲しいからとか……そんなことではなく……」

「だって、妖夢は私の一番（の友達）だしね。他人行儀もおかしい

かな、って」

……あれ？　なんか、またさらに顔が赤みを帯びたような……。

「あ、あなたはいつも卑怯です！　ちよつとそこになおきなさい！　愚直なまでのその性格、切って捨てて私と同じお墓に入れてあげます！」

「え、何、何なの妖夢！？　言いたいことが定まってないから何がしたいのかわかんないんだけど！？　怒ってるのか嬉しいのか、顔がどっちとも判断がつかないんだけど！？」

「これは、照れ笑いです！」

「じゃあなんで弾幕撃ってくるのよー！」

「これは単なる照れ隠しです！」

「じゃあなんで弾幕張るのよ、もう。やっぱり妖夢が何考えてるのかいまいち分かんないや。」

銃弾対日本刀。勝敗は藍さんによる弾幕によって引き分けとなった。

「妖夢、幽々子さまの許可は取ったぞ。ついでに旧地獄の有楽町までおいしいものを見て来いだそうだ」

「あなたはどうでしたか？　紫様より許可は下りましたか？」

さっきのつて主と会話してたんだ。式ってすごいな。念話できるなんて。それにしても、二人の主は本当に仲がいい。今も一緒にお茶を飲んでいるのだろう。

「ええ、それでこれを渡されました。あなた達が弾幕勝負をしている間に、紫さまが……」

持つとずしりと音が鳴るお金の束。私も財布は持参してるけど、その何倍、いや、何十倍はあるのではないだろうか。そんなにいたい何を買うのか……酒のつまみですね。

「買った物はスキマから送ればいいらしいですから、私も久々に休暇を満喫しましょう。温泉後はより道になりますが、行くかどうかは鈴仙に任せますよ」

旧地獄の有楽町か。そこなら人間はいないだろうし、私の狂気の眼もどうにかなることはないだろう。どうせ今日一日暇なんだし、薬の材料やお土産やら、買っていこうかな。

妖夢が用意してくれたお茶を最後まで飲み干すと、藍さんが急に立ち上がった。

「さて、休暇といってももう正午を回っている。日が暮れる前に行きたいところには行っておこうか。まずは博麗神社だったな」

確かに午前中とはもう言えない時間だ。白玉楼に来るまでは急いで飛んできたとはいえ、時間がかかったのは否めない。藍さんの言うとおり、早めにここを出たほうがスケジュール的に助かるのは確かだ。移動時間も計算すれば、ここをそろそろ出たほうがいいだろう。

「それでは、そろそろ出発しましょうか」

「そうですね。それでは紫さま、スキマをお願いします」

藍さんがそう叫んだと同時に、足元が開いた。

「——え？」

足元にはぱっくりと開いたスキマ。端はリボンのようなものがついていて、スキマの中には無数の目がこちらを見つめている。予想しえない事態でもあったし、何より初めての経験。私はもちろん、なす術もなくスキマの中へ落ちていった。

「——ふみゅっ！」

「よっつ」

「ふう、つきましたね」

私は頭から垂直落下してしまっただが、藍さんと妖夢は華麗に着地。これは経験の差なんだろうか。だとしたら私はこんな経験を積みたくはなかった。

「それにしても……藍さん、主を顎で使うのもどうかと思いますよ？」

先ほどの行為……つまり時間短縮のためとはいえ、主の能力を利

用するのはどうかと思う。

「う……ま、まあいいじゃないか！ 時間短縮には違いないんだ！」
そう言ってしまうばそうだけれど……なんか納得いかないなあ。
そうこうしているうちに、妖夢は妖夢で博麗神社に入っていた。
後ろには大きな鳥居。目の前には何年もの研鑽を積んで黒く煤けた
木でできた神社がある。参拝に来た際にお賽銭を入れる賽銭箱があ
るが、中身は何もないだろう。気分がだんだん良くなり、私も藍さ
んとあとに続くと、中では博麗の巫女と山の四天王の一人、伊吹萃
香が談笑していた。

「おじゃまします。霊夢、ちよつといいかしら」

白と赤を基調とする巫女服を着た少女が睨みながら振り返った。
肩の布がバツサリとなくなり、脇を露出した形の巫女服は珍しいが、
残念ながらあと一人の巫女も似たようなものだ。今さら巫女服の常
識をとやかく言うつもりはない。

「……いいけど、あなたがここに来るなんて珍しいわね、鈴仙。そ
れに妖夢も」

「私もなかなか来ないのだが？」

「藍の場合、紫があなたの分まで訪ねてくるからね。あなたからも
何とか言ってくれない？」

「……それは、すまない。紫さまにはこちらから言い聞かせるとす
る。けれど、期待はしないでほしい」

たははと、笑うしかない藍さん。紫さんは言って訊くような性格
ではないし、注意すればするほど余計に過激にするような人だ。藍
さん、ご愁傷様です。中間管理職が一番つらい。

「それで？ あなた達何しに来たの？」

「温泉か？ 温泉だったら大歓迎だぞー！」

お酒を瓢箪から直に飲みながら、萃香はふわふわした口調で答え
た。怠けて肘をつき、昼間っから酒を浴びるように飲むその姿は、
まさに休日の父親の姿だ。彼女は頭から角を生やし、服はところど
ころ擦り切れている。クリーム色の髪の毛は霊夢と同じようなりボ

ンで結わえられ、手には鎖がついていた。けれど動きにくいだかはないようだ。

さすがに私も彼女のことは知っていた。宴会になると一番目立ち、騒ぐのは彼女をおいて他にいない。

「温泉なら、神社で湯浴みに着替えて入りなさいな。私の功績の物じゃないから、ほば放置だし。萃香、案内してあげて」

霊夢が気だるげに萃香に任せる。

「おお、いいぞ。こっちだ」

私達は酔った鬼に案内されながら、奥の部屋まで行った。

……どうでもいいんだけど、誰か私がメガネをかけてることにそろそろ気がついてくれないかな？

「おお！ これはまたすごいですね」

「うむ、来てよかったな」

「はふう……疲れが流されるみたいですよ」

三者三様に驚きを表すが、誰からも感嘆の声が響く。入浴場としてこれだけ広いものは幻想郷内でもそうそうないだろう。

透明色の湯から立ち上がる湯気は向こう側を隠すように立ち上がっている。ちゃんと源泉からわき出る温泉を岩で囲っている様を見ると、ちゃんと温泉としての形を取るまでには霊夢が準備したようだ。

もちろん、今メガネをつけると曇ってしまうので外している。

「どうだ？ いい湯だろう」

「ええ……本当にいい湯です。けれど、なぜ貴女まで入浴しているんですか？ 萃香」

「細かいことはおいとけ！ 私だって温泉好きなんだよ」

そうはいうものの、木桶に熱燗とお猪口。そしてお馴染みの瓢箪を見る限り、温泉に入りに来たというよりもお酒を飲みに来ただけだろう。私の思惑通り、温泉につかるなりお酒を飲み始めた萃香さん。お猪口についだお酒を飲み干すと、さらについて飲み始める。

「まったく、飲酒もほどほどにしておけよ？　いつか身体を壊すぞ」
藍さんが萃香さんを窘める^{たしな}。

「なんだ？　欲しいのなら欲しいって言えばいいのに」

「——ただこう」

え？　ちょ、藍さん？　何で自分のお猪口を携帯して……　つても
う飲み始めた！？

何やらプチ宴会騒ぎになりかけた二人から離れる。絡み酒でもさ
れて酔うのは本意じゃない。

「……妖夢はどこかな？」

騒がしくなった萃香さんと藍さんの周りから離れて、一人温泉を
楽しんでいるであろう妖夢を探した。

何やら一人でぼんやりしている妖夢を発見した。

「何してるの？　妖夢」

「あ、鈴仙。いえ、今頃幽々子様はどうしているだろうかと思いま
して」

「妖夢、幽々子さんが心配？」

ギョツと口を紡いで妖夢は黙ってしまう。

「……心配です。だって——」

もしかしたら誘ったのは間違いかもしれない。妖夢からしたら、
楽しめる状況じゃなかったのかも。

「——空腹に支配された幽々子様が、幻想郷の住人を襲わないだ
ろうか、と」

「……あ、そっちの心配？」

「……私にとつては最重要事項ですよ……」

ふふふふ、と力なく笑う妖夢。何か思い出しちゃいけないもの
でも思い出したかのように、その顔には覇気がなかった。

「……幽々子様が何かする度私の仕事が増えて……この前だって居
酒屋に行ってお店を潰しかけるし……食欲にかけては……もう私だ
けじゃ……」

……妖夢が何やら愚痴を始めた。黒いオーラがにじみ出てるし、私愚痴を聞くのは得意じゃないし……。

「じゃ、じゃあね妖夢！ 楽しんでね！」

未だに愚痴を言い続ける妖夢を残して、私はその場を立ち去った。

「……はふう、落ち着く……」

ある一角では萃香さんと藍さんの叫び声が聞こえてくるし、妖夢は妖夢でまだ立ち直っていない。結局一人で温泉に落ち着いている。「……ん？」

ここにいる波長が、5人？

私は能力『狂気を操る程度の能力』を持つ。それは広義に解釈すると、狂気という波長を操る能力なのだ。波長とは超音波、電波、人の精神の波長や物質の波長なども私から見ると視覚化できる。霊力、妖力、魔力、気なども同様だ。

つまりは生物から出る波長を今感じ取ると、私を含めずに5人いるということだ。

「藍さん、萃香さん、妖夢、それと本殿からは霊夢さん……。もう一人は、だれ？」

三月精がいたずらに來たのか、河城にとりさんがステルス迷彩を試しているのか。温泉にもう一人、見えない誰かが入っていることは明らかだ。

（まあ、何かするわけでもないでしょうし）

取りあえず放っておくことにした。

数十分つかると、だんだん温泉が冷えてきた。それほど高い温度でもなかったし、今まで温もれたのが不思議なほどだった。

「……そろそろ上がるのかな」

湯ざめすると本末転倒だ。のぼせるのもこのあとの行動に支障がある。

ざばーっと音を鳴らし、タオルを押さえて藍さんと萃香さんに近

づく。すると二人とも完全に出来上がっていて、温泉の中なのに今すぐにでも寝てしまいそうだった。

「ちよつと、藍さん！ 萃香さん！」

このままでは風邪をひいてしまう。二人は目線をいくらか彷徨わせたあと、私と自分の身体を交互に見た。萃香さんが藍さんに触れると、ほろよいのだらしない藍さんの顔が急に覚醒する。あまりの豹変ぶりに若干悲鳴を上げた。

「……あ、温泉に入ってたのか」

「温泉、冷めてきたな。あたため直すか」

萃香さんが能力を使い、温泉の温度を上げ始めた。

「わ、すごい。温かくなってきた……でもどうやって……」

『疎と密を操る程度の能力』

疎とは密度が薄いこと。密とは密度が集中すること。

「物体には疎と密が必ず存在する。萃香の能力はそれを集め、散らし、密度を自在に変えることができる。疎を使えば体を霧のように霧散したり、密によつて体を巨大化したりできる。……ちなみに先ほどまで酔っていたのだが、アルコール分を『散らせた』ようだ。二日酔いの心配はないし、意識もはっきりとしている。便利な能力だな」

「へへへ、そりやどうも、もつとも、ここを密化したせいで他は疎と化したけど。空気や自分の身体には干渉できるんだけど、お湯とか液体、はたまた他人の身体には干渉できないのさ」

あ、そういうば。

「それじゃあ、ここの部分以外の温泉はあつたかくないんですか？」

「そうだね。熱を集めたただだから、基本的には熱を奪われるかな」
「？」

妖夢のところは冷めてるんじゃない……。

「妖夢！ 妖夢！」

駆け付けた時には身体を抱き、がちがち歯を鳴らせる半人半霊がそこにいた。

「まったく、余計な仕事を増やすんじゃないわよ」

博麗神社の霊夢を呼び、今は妖夢を寝かせてもらっている。萃香さんの疎と密は人体に使うのは危険らしい。アルコール分は揮発性が高いからできたそうだ。

「温泉の水ならともかく、人体は複雑だからね」。私が一步でも間違うと妖夢の身体自体が霧散することにもなるし、巨大化されても困る。結局は様子見だね」

「確か、地底に行くんでしょ？ 妖夢がある程度まで回復したら送って行くから、先にあんた達と……萃香も行きなさい。どうせ勇儀辺りにばこられるだろうし」

「そうだねえ」。勇儀だったら問答無用で襲いかかってくるだろうしね」

しみじみと萃香さんが思いをはせている。

星熊勇儀。地底に住まう幻想郷から追放された鬼の一人。

確か、萃香さんと一緒に妖怪山の四天王だったはずだ。怪力乱神の力を持ち、鬼の中でも『力の勇儀』と恐れられていたとか。自分にルールを課し、そのルール下で戦う。遊びを遊びのまま楽しむ道楽主義者。それはスペルカードで行う決闘でも変わらないらしい。

どんな人かは分からないが、酒が好きというのは分かっている。鬼だし。

「ま、あんまり勇儀は怒らせない方がいいわよ。力だけならまだしも、頭も切れる。私も本気で戦われたら勝ってたかどうかかわからないしね」

霊夢さんが他人を評価するなんて珍しい。それほどまでに、星熊勇儀さんに恐れを抱いたというのか。

「単独で妖怪山を動かしたりもできそうだしね」

それは……歩く兵器なのでは？

「ふむ。留意しておこう」

「心にとめておきます」

力の強い者には二種類あると私は思う。

単純に能力が半端ない。これは紅魔館のフランドール、地底の靈烏路空などが当てはまる。その能力の威力が他を圧倒し、力のごり押しだけで勝てるようなものだ。まあ、能力に振り回されている感も拭えないが。

そして頭を使うもの。スキマ妖怪の八雲紫、白玉楼の西行寺幽幽子、永遠亭の師匠もそれに当てはまるだろう。能力だけでもどうにかなるが、それでは面白くない。ある程度までは力を隠し、頭を使って戦略を練るタイプだ。

しかし、そのどちらとも当てはまるタイプが星熊勇儀。私の過大評価でなければ、幻想郷から鬼が追放されたのは、このような人達がいいたからかもしれない。

「それじゃあ、案内するよ？ こっちこっち！」

神社から出た萃香さんを藍さんと一緒に追う。

「ほう、ここが地底か。人里より活気があるな」

「ほんとですね。薬の行商範囲をここまで広げるのもいいかもしれません」

来る途中、何やら蜘蛛らしい妖怪や、釣瓶落としの妖怪と会ったが、萃香さんを見るなりどこかへ行ってしまった。萃香さんの妖力は異常なのでその気持ちはよくわかる。一度対峙してみると二度と関わり合いにはなりたくない。

それでも私たちが仲がいいのは、萃香さんの人当たりの良さだろう。

「さすがに地上の妖怪だから、奇異の目で見られることはあるだろうけど、そこは我慢してね」

萃香さんを先頭に、私、藍さんが後に続く。

「それにしても、本当に視線がきついですね」

「それはそうだろうな。ここは幻想郷から追放された者たちなどの集落のようなものだ。地上の妖怪はともかく、紫さまの式である私

は何を言われても反論できる立場でもない」

「そういうこと」。でも勇儀は条件さえ満たせばそんなこと気にしないから堂々としててもいいよ」

萃香さんが一軒の家の前に止まる。軽く二回ノックすると、確かに額に角がある鬼が出てきた。出てきたときはあまり友好的とは言えない目線でじろじろ見ていたが、私たちの影から萃香さんが顔を出すと途端に表情を明るくした。

「来たよー勇儀」

萃香さんが気の抜けたような返事をする、勇儀さんは豪快に笑う。

「萃香！ よく来たねえ！」

初めて見ると、金髪で赤い角、赤い眼をした鬼だということがよく分かった。活発に動けそうな白地の半袖の服や、赤と青のスカート、そして萃香さんと同じように手に手錠のようなものがついていた。しかし、特筆すべきはそこじゃない。胸、胸ですよ。反則ですよ。まさに鬼の名に恥じないダイナマイトボディ！ 思わず妖夢と目を合わせ、盛大にため息をついた。

ドアから出てきた勇儀さんが奥に私たちを案内してくれた。中は和一色で、永遠亭と似た部分も多く、初めて訪れる割に妙に落ち着ける部屋だった。以外に乱雑に物が置いている訳でもなく、生理整頓をきちんとしているようだ。

「まあまあ、お客人。緊張せずに。そこまで異質なものが置いてある訳でもないだろうに」

「ふむ、案外綺麗好きのようだな。もっと散らかった印象があったが……考えを改めよう」

「私ももっと乱雑なイメージがありました」

「初対面なのに、ズバズバ言ってくる子たちだねえ」

頬を掻きながら笑う。第一印象としては何でも話せるお姉さんといったところだろうか。

「さて、まずは自己紹介だ。私は星熊勇儀。ここら一帯を仕切る鬼

だ。その萃香と同じく山の四天王で『怪力乱心をもつ程度の能力』
を持っている。趣味は弾幕勝負で負けたことはそんなないが、こ
の前地上の魔法使いと巫女にやられちゃったよ」

負けたことをむしろ清々しいことのように話す。

「次は私だね。まあ知らない人はここにいないけど一応ね。私は伊
吹萃香。勇儀と同じ山の四天王で『技の萃香』って言われてるよ。
お酒を飲むことが生きがいかなあ」

「私は八雲藍だ。『式神を操る程度の能力』を持っている。地底の
者や鬼たちには聞こえが悪いだろうが、八雲紫さまの式でもある」
ピクツと勇儀さんの肩が動いた。

「八雲……紫ねえ……。その名をここで出すことが、どんなことにな
るかは分かって言っているのかねえ」

私の能力が辺りの気配の増幅を悟る。勇儀さんの家の周りには鬼
の気配がたくさんあった。まさか……囲まれている？

「地底の住民はほぼ大半、その名を忌み嫌っている。むやみやたら
と言ってしまうと、外の連中も手を出すかもしれない」

勇儀さんは気づいてる。外の鬼の存在に。

「確かにここでは禁句だろうが、私が仕える方は紫さましかいない。
鬼ごときにびくびく震えて、主の名に傷をつける方が私にとって恐
れ多いことだ」

「鬼ごとき——。いいねえ、お嬢ちゃん。元気がいい、けれど相
手をわきまえな。あんたは所詮妖怪だ。力で鬼に勝とうなんて百年
早いよ」

「頭を使えば鬼なんて説き伏せられる。紫さまとあなた達がいい例
だ。鬼は紫さまの前に膝を折った。力でねじ伏せるのなら、今の幻
想郷は鬼の天下になってはいないか？」

対角線上に築かれる妖怪と鬼の言い分争い。徐々に徐々に互いに
意見を膨らませていき、どちらも激昂していた。萃香さんは「やれ
やれ」と肩をすくめているし、藍さんも勇儀さんも意見を変えよう
としない。

(……なんで自己紹介でこんな険悪なムードに……)

外の鬼の妖力も高まってきている。何とかこの場を抑えるにはあれしかないだろう。

「お二人とも、少し落ち着いてください!」

「これが落ち着いていられるか!」

息ぴったりのユニゾン。お二人本当は気が合うんじゃないですか?

「じゃあ、弾幕勝負で決着をつけましょう!」

お互いが納得したかのように頷く。弾幕勝負ならお互いの言い分を力づくで通せる。勝てば官軍、負ければ賊軍。結局は力がものを言うのが幻想郷だ。

「弾幕勝負、望むところだ」

「いいねえ、遊んでやるよ。お譲ちゃん!」

どこが勇儀さんは八雲紫のことを気にしない人物なんですか、萃香さん。

結果だけいえば、両者ノックアウト。勇儀さんは地面で大の字に倒れ、藍さんは柱に寄り掛かって傷を抑えていた。なんかもう……無茶苦茶だった。

弾幕勝負だったはずなのに、どちらも目にも止まらない応酬だった。藍さんはスピードと陽動を、勇儀さんはパワーのみで突っ切っていた。結果、両方同時に被弾し、スペルカードを出す前に決着をつけた。

「……大丈夫ですか?」

私が声をかけると、勇儀さんが笑いながら起き上がる。しかし、一向に立とうとはしなかった。

「はは、参ったねえ、一步も動けないよ」

「私も同じだ。全く、魅せるための勝負とはいえ、やりすぎではないか」

魅せるための勝負。萃香さんいわく『鬼は手加減を知らなくて、一度強いやつと戦っているところを見せたほうがいいんだよ。バカでも襲っちゃいけないやつてのは教えないとね』と言っていた。つまりは無駄な争いを避けるために力を示す、ということらしい。極道風に言つと、けじめをつけた、らしい。

藍さんが不満を隠さず勇儀さんを睨みつける。確かに魅せるための戦いとはいえ、もう少し穏便に済ませられる方法はなかったのあろうか。

「ま、これであんたは力を示した。流石に私をどうにか組伏せることが出来る相手に向かっていくバカはいないさ。観光、なるだけ楽しんでいけよ」

いや、観光を楽しむどころか、藍さんはしばらく動けそうにないんですけど……。しばらくして起き上がった藍さんも観光など出来ない判断したのか、よろよろとこちらに向かってきた。

「すまん、鈴仙。このとおり満足に動けないわけだが、先に行つてきてくれ」

「あ、はい。お土産ですよ。分かりました」

事の次第を見ていた萃香さんもこっちに近づいてくる。

「じゃあ、私も行くよ。酒を飲む仲間だから、二人の趣味は良く分かっているしね」

「頼むぞ萃香。じゃあな鈴仙」

藍さんは弾幕の被弾箇所を押さえながら勇儀さんの家へと入っていったしまった。

「じゃ、行きましょうか。萃香さん」

「うん。じゃ、いこっか」

常に酔っている萃香さんを先に行かせるわけも出来ず、並んで有楽町まで歩いていった。

「よし……こんなものかな」

有楽町に並ぶ出店に片っ端から入っていく。萃香さんがいるおかげでそんなに争いこともなく買い物は進んでいき、妖夢と藍さんに頼まれていたものや、二人の主のおつまみ用に萃香さんが次々と買っていく。

有楽町に入ってからしばらくたつたところ、永遠亭のみんなに何か買っていつてあげようと思った。

「萃香さん、ちょっと別行動いいですか？」

「あゝ、うん。別にいいけどあんまり絡まれないようにね。鬼は遊びごとが好きだから絡んでくることもあるよ〜？」

「あ、分かりました」

心に留めておく程度に訊き、これまで回った店の内装を思い浮かべながら、誰に何を買うか思案する。

師匠は珍しい薬や草などの研究対象の材料を望むでしょうし、買うにしてもお酒が薬草の類。でもこれまでの店に薬などの薬草が置いていなかった。地底のような荒れた大地に草木が生えるなど考えられないから、どこにも薬や薬草は置いていないだろう。だったら、お酒かな。

てゐは一風変わった奇抜なお土産が好きなのよねえ……。激辛の香辛料や臭いのきついクサヤとか、あとはニンジンか。後半二つは地底には置いてないから、どこかの飲食店で香辛料でも買ってあげようかしら。……十中八九、イタズラに使うでしょうけど……。

姫様は何が好みなのかしら？ 普段会う機会もないし、朝はお見かけしないから夜型の生活を送っているのだとは思うけれど……。それならお酒は控えよう。夜なんか飲んだら、次の日絶対起きられなくて師匠に怒られるでしょうし。だったら……嗜好品にしよう。噛みタバコとか水煙草なら、大丈夫かな。

ある程度の算段はついた。早速来た道を引き返して――。

「――また、あの波長だ……いったい何の用なのかしら」

博麗神社から私を監視し続けているような波長がずっと付き纏っ

ている。気を集中すればそこに人型の何かがいるのは分かるのだが、なぜか姿は見えない。

私についてきているということは私が狙いなのだろうけど、残念ながらそこまで恨まれることをした覚えもなければ好かれることをした覚えもない。単なる私怨やストーカーの類なら簡単に追い返しておしまいたが、目的が何か分からない。いったい、何なの？

取りあえず様子を見ましよう。今すぐ何かするわけでもなさそうだし、殺気があるわけでもない。

人ゴミに紛れるように、目的の店を目指した。

目的のものを買い終えると、藍さんの所に戻る。萃香さんは広場で宴会騒ぎをしていて、とてもじゃないが入っていける雰囲気ではなかった。

「藍さんへ戻りました……よ？」

おかしいな。誰もいない。

家の中はガランとしていて人の気配はない。出かけたのかな？
とっていると、ちゃぶ台の上に書き置きがあった。

『ちよつと飲んでくる。藍・勇儀』

「なんだかんだで仲いいですね……お二人とも」

先ほどまで弾幕勝負をしあった仲とは思えないほど意気投合しているようだ。おそらく真面目な藍さんと豪快で包容力のある勇儀さんは馬があつたのだらう。まるで長年来の旧友のような関係を築いていきそうだ。

「旧友……友達……親友……。私には程遠い言葉ですね」

一番私の仲の『友達』の定義に近いのは妖夢だけだ。

師匠や姫様は友達などという枠組みに入れるものじゃない。それよりももっと上で、守るべき対象。てゐは友人というよりも手のかかる妹のようなものだ。

『友達』とは、軍人であった私に言わせれば、一緒にいて心安らく相手ではなく、腕を競い合うライバルのようなものを指す。妖夢は

そのどちらにも当てはまった。

ただ墮落へと向かうわけではなく、時に敵対し、時に共闘し、程よく力が拮抗している。獲物も弾丸と剣ということから両極に位置しているにも関わらず、妖夢は一緒にいてなぜか心が安らいだ。お互い時間がないために言葉を交わす機会もほぼないが、それでも良好な関係を築いていけるといえるのは分かる。これ以上の『友達』はいないだろう。

だからこそ、藍さんや勇儀さんが羨ましい。

「どちらも最悪な状況から一緒にお酒を飲むなんて、私にはできないな」

ただでさえ狂気の眼が、他との関係を隔絶する。

人間は眼を合わせただけで狂気に囚われ、妖怪ですら注意しないと眼を合わせられない。

永遠亭のウサギは無意識に眼を合わせないようにしてくれている。てゐや師匠、姫様は眼を合わせても何ともなかった。他にも霊夢さんや八雲紫さん、藍さん、幽々子さんなど、長年生きてきた者や能力からある程度抵抗できるものは効きにくい。その中で私は友人を作る気などない。

なぜなら私が相手と釣り合わないからだ。

軍人として月で活動していたころなど、常に周りには疑心暗鬼。格闘技術や射撃術の知識は豊富にあるが、裏を返せばそれ以外は幼子に等しい。箸の持ち方や薬の調合方法、酒の飲み方、料理の作り方。永遠亭で師匠が一般教養を叩きこんでくれたおかげで、今は人並みに過ごしていける。今は知識を求めなければ、私の外見と生きてきた年数が釣り合わない。

ただ自分をよく見せるために。ただ自分が相手と同等であることを示すために。

自己満足の塊となった私は、ただひたすらに知識を求める。

知識人は得てして孤独だ。けれど、人には好まれ求められる。私は知識もない。けれど知識人の振りをして周りを遠ざける。

何と矛盾した考えだろう。我ながらおかしくて冷笑してしまう。

友が欲しいなら求めればいい。だけどブライドがそれを邪魔する。高潔な月の民が汚れた地上の民とどうして手を結べようか。月の民の一員として、恥ずかしくない友を持つために、私は地上で知識を求める。自分の体裁を保つ、それだけのために。

今は月を裏切り逃げてきたこの身が何を言わんとするか。

今の私は幻想郷の一員なのに、月の教えは私を律する。私自身がどう思おうが、どんな友を持とうが、それは誰からも咎められることはない。ただ私の欲するままに行動すればいいのだ。

「……これが月の考えで、私なんだろうな……」

深い思考から脱すると、手に書き置きを持ったまま呆然としていた。しばらく固まっていたようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0856t/>

東方忘昧変

2011年5月7日19時10分発行